

2014年『世間胸算用』【現代語訳】

ぶんげん

分限になりける者は、その生まれつき格別なり。

金持ちになった者は、

その生まれつきから(持っているものが)格別である。

むすこ

てならひ

ある人の息子、九歳より十二の歳の暮れまで、手習

ある人の息子が、

9歳から12歳の年末まで、

書道教室に

あひだ

ぢく

につかはしけるに、その間の筆の軸を集め、そのほか

通わせたところ、

その間の(自分が使った)筆の軸を集め、

その他、

人の捨てたるをも取りためて、ほどなく十三の春、

他人が捨てたのも取り溜めて、

ぢくすだれ

間もなく

13歳の春、

もんめ

我が手細工にして軸簾をこしらへ、一つを一匁

自分の手作業で、

軸の簾を作り、

一つを銀貨一匁

ぶん

3つも

初めて

銀貨四匁五分を

五分づつの、三つまで売り払ひ、はじめて銀四匁五分

まうけしこと、我が子ながらただものにあらずと、親

儲けたことを、

「我が子ながら、

只者ではない」と、

親の

うれ

の身にしては嬉しさのあまりに、手習の師匠に語り

立場としては

嬉しさのあまりに、

(子の)書道の師匠に語った

ければ、師の坊、このことをよしとは誉めたまはず。

ところ、師匠である坊主は、このことを

「良い」とは

褒めなさらぬ。

われ

すひやくにん

「良い」とは

しなん

「我、この年まで、数百人子供を預かりて、指南

「私は、この年まで、

数百人の子供を

預かって、

指導

はう いっし

いたして見およびしに、その方の一子のごとく、

しまして、

見届けてきましたが、

お宅の子供のように、

ア 気のはたらき過ぎたる子供の、末に分限に世を

気が回り過ぎている

子供が、

晩年に 裕福に

暮らしたるためしなし。

暮らした例は無い。

こじき

しんだい

また、乞食するほどの身代にもならぬもの、

また、
ちうぶん

身の上にはならないもの、

ちうぶん

とせい

中分より下の渡世をするものなり。かかることに

中から

下の
職業をするものである。

このようにするには、

は、さまざまの子細あることなり。

様々な詳しい

理由があることである。

おぼ

そなたの子ばかりを、かしくきやうに思しめすな。

あなたの子供だけを、

賢いように

お思いになりなされるな。

それよりは、イ手まはしのかしくき子供あり。

あなたの子供より、

うまく手配してお金を稼ぐ、ずる賢い子供がいる。

はつき

我が当番の日はいふにおよばず、人の番の日も、箒

自分が
当番の日は

は
言うまでもなく、

他の人が当番の日も

箒を

取りどり座敷掃きて、あまたの子供が毎日つかひ

取って

座敷を

多数の

子供が

毎日

使い

捨てたる反古のまろめたるを、一枚一枚皺のばし

捨てた

半紙を

まろめたのを、

一枚一枚

皺をのばして、

て、日ごとに屏風屋へ売りに帰るもあり。

毎日

屏風屋へ

売って

帰る子供もいる。

たうぶん

これは、筆の軸を簾の思ひつきよりは、当分の用に

これは、

筆の軸を

簾にする
思いつきよりは、

すぐに

役に立つ

立つことながら、これもよろしからず。

ことではあるけれども、
これもよろしくない。

またある子は、紙の余慶持ち来たりて、紙つかひ

またある子は、

余分の紙を

持ってきて、

紙を使い

過ぎて不自由なる子供に、一日一倍ましの利にて

過ぎて

困っている

子供に、

一日あたり倍の

利率で

これを貸し、年中に積もりての徳心、何ほどといふ

これを貸し、

年内に

積った

利益は、

この上なく大きい。

限りもなし。ウ、これらは皆、それぞれの親の
これらは みな、それぞれの

せちがしこき気を見習ひ、自然と出るおのれおのれ
利害損得にこだわる気質を 見習い(やったことで)、自然と 発生した 各々

が知恵にはあらず。
の知恵 ではない。

その中にもひとりの子は、父母の朝夕仰せられし
その(いろんな子供の)中にもある一人の子は、 父母が 朝夕に 仰ったのは

は、『ほかのことなく、手習を精に入れよ。成人して
『他のこと(に見向きすること)なく、書道に 精神を注ぎなさい。(それが)成人して

のその身のためになること』との言葉、エ反古には
あなたのためになる秘訣だ』 との言葉を、 無駄には

なりがたしと、明け暮れ読み書きに油断なく、後に
なりにくい(はずだ)と、 明け暮れ 読み書きに(手中して)油断することが無く、 後には

は兄弟子どもにすぐれて能書になりぬ。オこの心
兄弟子達よりも (字が)優れて、 達筆になった。 この(親の言葉通り、書道に専念する)

からは、ゆくすゑ分限になる所見えたり。その子細
心構えからは、 将来 裕福になることが 見えた。 その詳しい理由は、

は、一筋に家業かせぐ故なり。惣じて親よりし続き
ひとすぢ 一心に 家業に 打ち込む(はず)だからだ。 一般的に、 親の代から続いている

たる家職のほか、商売を替へてし続きたるはまれ
家業の他に、 商売を 替えて 続いているのは 稀

なり。手習子どもも、カおのれが役目の手を書くこと
てならひご 書道の生徒も、 自分の役目である 書道は

はほかになし、若年の時よりすどく、無用の欲心
はよやくねん 幼い頃から 鋭く抜け目がなく、無駄に欲深い(のは良くない)。

なり。それゆゑ、第一の、手は書かざることの
だから、 第一の(本分である)書道をしないことは

あさまし。その子なれども、さやうの心入れ、
呆れる。 その(筆軸で簾を作って売った)子であっても、そのように(書道以外に)注力するのは、

よき事とはいひがたし。キトかく少年の時は、花を
良いことは 言い難い。 幼い頃は 花を

むしり、紙烏をのぼし、知恵付時に身を持ちかため
い か ち え づ き ぐ き
むしって風揚げ(するような外遊びを行い)、 学ばべき年齢になったら 将来のために学いのが、

たるこそ、道の常なれ。七十になる者の申せしし
普通(の学び)の方法である。七十歳になる者の 申し上げた

こと、ゆくすゑを見給へ」と言ひ置かれし。
こと、 将来を御覧なさい と 言い置かれた。